

近代文化研究所所員勉強会 要旨

令和4年12月8日(木) 16:30～18:00 1号館 2M01

「音楽という文化を支える心理的基盤」

人間社会学部心理学科専任講師・生活心理研究所所属教員 池上 真平

音楽は人類の歴史上様々な文化でみられ、もはや音楽そのものが文化の一つともいえる。それでは、音楽という文化を支えているものとは一体何だろうか。心理学的に考えてみる。

時代や場所を問わず音楽が聴かれてきたことは、音楽を聴くことに何らかの利点があることを示唆している。我々が行った実証研究(池上他, 2021)では、音楽聴取には7つの主要な心理的機能(自己認識, 感情調節, コミュニケーション, 道具的活用, 身体性, 社会的距離調節, 慰め)があることが見出されている。こうした機能が、人を音楽に惹きつけ続けてきたのかもしれない。

そもそも、私たちが音楽を享受できるのは、私たちの心に音楽を知覚・認知する仕組みやプロセスが存在するからである。例えば音楽の時間次元に関しては、一定時間ごとに刻まれる拍(beat)を音楽の中から見つけ出し、その拍を心理的基準として用いてリズムを認知している。音高の次元に関しては、音の周波数の推移の他に、調性(tonality)が重要な手がかりとなってメロディが認知される。すなわち、私たちは音楽を聴きながらあらゆる音高のなかから心理的に「しっくりくる」音(たとえばC majorの曲の場合はC音)を見つけ出し、それを心理的な基準として用いながら、音同士を相対的に捉えるのである。

音楽が伝えるのは、リズムやメロディだけではない。音楽を通じた感情の伝達も、音楽の重要な側面である。音楽家の表現意図は、演奏音の物理的な特徴(テンポや音圧や音の繋がり方など)として現れるのだが、こうした特徴は、感情によって異なる。だから聴取者はそれを手がかりに、音楽に込められた感情を解釈して認知することができる。

以上のように、音楽には私たちが惹きつける多様な心理的機能があり、私たちの心には音楽を単なる音でなく音楽として享受できるような仕組みとプロセスがある。音楽という文化はこうした心理的基盤に支えられている。

池上他(2021)

15-88歳の916名を対象に全国的調査を実施し、音楽聴取の主要な機能と個人差について検討。

7つの機能

- ・自己認識：自分自身に関して考えることを促進する機能
- ・感情調節：望ましい気分や感情体験をもたらす機能
- ・コミュニケーション：他者との関係を促進する機能
- ・道具的活用：目的を達成するための道具としての機能
- ・身体性：身体の動き・反応・状態に変化をもたらす機能
- ・社会的距離調節：外的世界と自己の距離を調節する機能
- ・慰め：気分の落ち込みの解消に貢献する機能

⇒ こうした機能の多様性が音楽が人々に浸透してきた要因か。

出所：「7つの機能」池上ほか(2021)



所員勉強会の様子

(いけがみ しんぺい)